津久見市大字四浦の地名発祥について

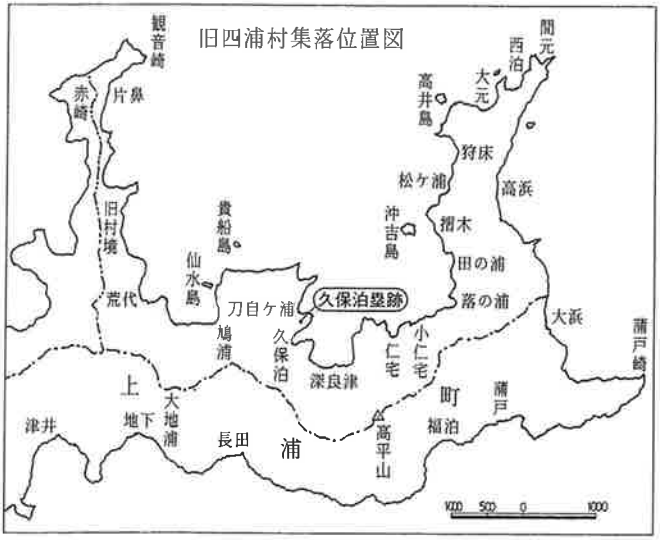
橋　迫　　照

（会員・佐伯市鶴岡町）

各地の大字や小字の地名は、その起源や謂れを調べて見ると、非常に興味のある事実が潜んでいることがある。そこで今回、私の故郷である津久見市四浦の地名はどうした経緯を経て付けられたのか、また、その範囲と四浦と呼ばれるようになった理由や、いつ頃から文献に現れているのかを調べてみたい。

私は機会ある度ごとに、四浦の老人達や知識人と言われている人々に聞いてみたが、はっきりとした事は教えて貰えなかった。浦が四つあるからではないかと言うのが一番ポピュラーな答えだったが、ではその浦はどこどこを指すのかと聞くと、さて何処だろうと考え込んでしまう有様。

現在、集落の名で浦の字が付くのは、鳩浦・刀自ヶ浦・落の浦・田の浦・松ヶ浦の五ヶ浦であるが、これらが四浦の地名の基礎になっているのだろうか？　そこで現在津久見市大字四浦の集落を西から順に列挙してみると、荒代・鳩浦・刀自ヶ浦・久保泊・深良津・落の浦・田の浦・摺木・松ヶ浦・狩床・大元・西泊・間脇・高浜と続いている。



私はこの中の久保泊という所で生まれ育ったのだが、小学校は鳩浦にある四浦村立仙水小学校の久保泊分教場であったが、中学校は同村立四浦西中学校で、鳩浦まで山越えして三年間通ったものである。

当時通学で毎朝鳩浦の集落に入ると、「今朝は大四浦（おおようら）の方は漁はどうだったか」とよく聞かれたのを覚えている。今から五十年近くも前の事であるが、当時鳩浦や荒代の人達は、刀自ヶ浦以東のことを大四浦と呼んでいたのだろうか。

その頃の漁業協同組合は、四浦と仙水に分かれていたと記録にはあるが・・・。

先きにも書いた浦が四つで四浦だろうとのことだが、ではその浦は何処を指すのだろうか。

◆江戸時代の四浦は上浦村の内で、鳩浦村と落野浦村に別れていたが、総称して四浦と呼んでいたのだろうか？。

本会の役員（平成十年度会長）でもある汐月三代吉氏の編集になる「佐伯藩略年表」に、天明五年（一七八五）十二月、上浦・四浦の網持ちが前年設置された大阪差配所の廃止を嘆願したとしているが、これは藩がほしか（干鰯）の専売をもくろんで、大阪にその集荷場所を設置したものであるが、途中瀬戸内での密売が多く、結局失敗に終ったもので、これは「大分県歴史辞典」からの引用としてあるが、果たして原書に「四浦」と書いてあったのだろうか。

角川地名辞典には、四浦（津久見市）は津久見湾に面する四浦半島の北岸に位置する。地内の字峰（大峰か）には弥生時代の遺跡「峰遺跡」がある、と書いてある。

◆**近世四浦**　江戸期～明治二十二年の村名。豊後国海部郡佐伯荘のうち。慶長六年から佐伯藩領。上浦村に所属。「豊後国志」には鳩浦・落野浦・蒲戸浦・福泊浦の四浦の別称とある。また、寛永期と推定される毛利高政触状に「四浦肝煎中へ」という宛名が見える。

これは佐伯藩史料「温故知新録」にも記載されており、原本は津久見市軸丸家にあり、「大分県史料」第三十五巻に収録されているものであるが、同じ藩政史料「旧高旧領」には村高が百二十五石余とあり、蒲戸浦・福泊浦はそれぞれ別に村高があがっていることから、明治初期頃に、鳩浦と落野浦を併せて一つの独立村としての性格を

持つようになったものと思われる。

明治四年大分県に所属。同二十一年の漁戸六百五十六、漁場は片鼻・荒代・鳩浦・刀自ヶ浦・久保泊・深良津・落ノ浦・田ノ浦などの沖で、鰛（鰯）・鰤・鮪など獲っていた（県統計書）。

同二十二年保戸島と合併して四保戸村が成立。その大字となる。

◆**近代四浦村**　明治二十五年～昭和二十六年の北海部郡の自治体名。四保戸村が当村と保戸島村に分村して成立。大字なし。役場を字四浦に設置としてあるが、これは記録によれば初め落ノ浦に置いたが、四浦の中程と言うことで深良津に移転した。

大正の終わりに落ノ浦に移転。このことは四浦役場騒擾事件として、県行政資料「四浦一件」（大分県立図書館蔵）に記載がある。

明治二十五年の戸数六百八十二、人口四千百八十一。大正九年七百三十一、三千七百八十五。昭和五年七百三、四千二百五十二。同二十五年七百六十九、四千五百二十三。漁業を生業とする。

昭和二十六年津久見町ほか二カ村と合併して現行の津久見市となり、同市の大字となる。

◆**近代四浦**

(1)明治二十二～二十五年の四保戸村の大字名。明治二十六年四保戸村が成立、前の四浦村・保戸島村に分村。

(2)昭和二十六年～現在の津久見市の大字名。

以上のような変遷を経ている訳であるが、前掲の「豊後国志」という書物は、寛政七年（一七九五）に豊後竹田の藩主中川氏が、親戚である時の幕府中老松平良明の命で作成を命ぜられ、藩士唐橋世済（君山）を起用して、豊後国内の諸藩を網羅した書物である。本人は完成前に死亡して、後継者の田能村竹田などが完成させたといわれている。

次に「大分県地名辞典」でめぼしい地名を調べて見よう。

◆**鳩浦村**　津久見市四浦鳩浦・荒代

津久見湾に面する四浦半島の北岸に位置し、西は網代浦。宝徳二年（一四五〇）四月一日の薬師寺新九郎給所

坪付（薬師寺文書）に鳩浦と見え、蚫（あわび）（鮑）代として分銭一貫五百文を献納したという記録がある。

江戸時代は佐伯藩領上浦（かみうら）村を構成する一村であった（上浦村＝現上浦町）。「正保郷帳」では津久見郷に属し、田方十九石余、畑方八石余。日損所（水利施設がなく日照に弱い土地）で柴山がある。

元禄十三年（一七七〇）の「国東速見大分海部郷帳違目録」（旧杵藩史料）には「上浦町之内鳩浦」とあり、当無高。また、「元禄見稲簿」にも上浦村内の高無し村として見えることから、元禄郷帳作成の段階で上浦村の枝村とされ、無高の扱いになったと思われる。

享和三年（一八〇三）の「郷村仮名付帳」（佐伯藩史料）では上浦村枝郷とされ、当浦内に行鼻（かたはな）（片鼻）なる地名が記されている。

また、東の久保泊浦・刀自ヶ浦はともに当浦の枝村であった。「伊能忠敬測量日記」（文化七年〈一八一〇〉二月二十八日条）並びに「豊後国志」によると、落野浦と蒲戸浦・福泊浦（上浦町）の三村と併せて四浦と称したという。

当浦湊は広さ四町、長さ十町の大湊で、水深が深くて波も穏やかなため大船の入港が可能な良港であった（同書）。「豊後古城蹟并海陸路程」にも「岸深く、潮の干満にかまひなく船懸り吉」と見える。

竈（かまど）数八十一、人数八百四十三（温故知新録）。忠敬は二月二十八日～三月二日まで当浦に滞在して測量している（前掲測量日記）。「旧高旧領取調帳」には当浦の名は見えず、久保泊浦・深良津浦・落野浦と合わせて四浦として高百二十五石余。真宗大谷派立法寺（りゅうほうじ）、天満神社あり、としている。同年の宝歴五年（一七五五）の在浦村立位付（佐伯藩史料）は上の村。

◆**久保泊浦**　津久見市四浦、久保泊・刀自ヶ浦・鳩浦の東、津久見湾に面する四浦半島の北岸中央部付近に位置する。

天正十四年（一五八八）十二月、豊後を攻めた島津方の水軍が久保泊に侵入。大友方は鳩浦の鳩源介、久保浦（久保泊）の賀島中務少輔・右馬助、深浦（深良津）の賀島三河守・主殿助、越智浦（落ノ浦）の紀主馬助・九郎らが久保泊塁に拠って兵船を出し、島津軍の上陸を阻止した。

島津軍は楮河原（橡河原とも）の入江で下船して久保泊塁を攻めたが、大友方は防戦撃退している。このとき大友宗麟は鉄砲・火薬を送ったという（大友文書録）。「大友興廃記」「豊後国志」も久保泊塁の合戦では津久見衆の活躍を伝えている。

慶長元年（一五九二）、近衛信輔が配流地より許されて都へ帰る途中、彼の供をして九州東岸を訪れた玄与は、八月三日海路保戸島に到着、間近に「雲どまり」を眺めたとしている。（玄与日記）。

江戸時代は佐伯藩領で上浦村を構成する一村であった。「正保郷帳」では津久見郷に属し、田方五石余、畑方九石余、日損所で柴山がある。元禄十三年（一七〇〇）の「国東速見大分海部郷帳違目録」（旧杵藩史料）には当無高とあり、また、「元禄見稲簿」にも上浦村内の高なし村として見えることから、元禄郷帳作成の段階で上浦村の枝村とされ無高の扱いになったと思われる。

享和三年（一八〇三）の「郷村仮名付帳」（佐伯藩史料）によると、上浦村枝郷で「伊能忠敬測量日記」では鳩浦の枝村としている。宝歴五年（一七五五）の在浦村立位付（佐伯藩史料）は中の村。

忠敬は前掲測量日記に「鳩浦枝久保泊より初め、同トジノ浦人家三軒、同赤碕人家一軒」と記し、また、三月二日にも当浦から深良津浦を測量している。「旧高旧領取調帳」では四浦の内、天満神社がある。

◆**深良津浦**　津久見市四浦深良津、久保泊の東、津久見湾に面する四浦半島北岸中央部付近に位置する。深良津浦とも記した（正保郷帳など）。

江戸時代は佐伯藩領上浦村を構成する一村であった。享和三年（一八〇三）の「郷村仮名付帳」（佐伯藩史料）では上浦村枝村とされるが、「伊能忠敬測量日記」には落野浦村の枝村と記されている。「正保郷帳」では津久見郷に属し田方九石余、畑方五石余日損所で柴山がある。

元禄十三年（一七〇〇）の「国東速見大分海部郷帳違目録」（旧杵藩史料）には「上浦村之内深良津浦」とあり、当無高「元禄見稲簿」にも上浦村内の高なし村と見えていることから、元禄郷帳作成の段階で上浦村の枝村とされ無高の扱いとなったと思われる。

宝歴五年（一七五五）の在浦村立位付（佐伯藩史料）は上の村。忠敬の日記には、村内鬼毛（おにげ）には人家が一軒あっ

たと記す。鬼毛とあるが原文を解読する際に「鬼宅」とあったのを「鬼毛」と間違えたものと推定している。毛と宅の字はくずしが非常に紛らわしい字である。（筆者注）

文久三年（一八六三）に佐伯藩庁に提出した落野浦村からの村明細帳（村勢明細報告書）の控えには、同所を鬼宅、次の場所を小鬼宅と明記してあるので、現在の仁宅・小仁宅は鬼宅・小鬼宅と呼称していたのだろう。（前掲測量日記）。「旧高旧領取調帳」では四浦の内に含まれていた。地内に天満神社がある。

◆**落野浦村**　津久見市四浦　落ノ浦・田ノ浦・摺木・松ヶ浦・狩床・大元・西泊・間脇・高浜

深良津の東、津久見湾に面する四浦半島の北岸東部に位置し、南は蒲戸浦（上浦町）。

「豊後国志」によると鳩浦・蒲戸浦・福泊浦（上浦町）の三浦と併せて四浦と称したという。当浦の八町沖合には鳩嶋・木船島があるという（両豊海上行嚢抄）。江戸時代は佐伯藩領上浦村を構成する一村であった。

「正保郷帳」に落野浦と見え、田方十四石余、畑方十二石余。ほかに田野浦として高四石余（畑方）と書いてあり、両浦とも津久見郷に属し、日損所、柴山がある。

元禄十三年（一七〇〇）の「国東速見大分海部郷帳違目録」（旧杵藩史料）には「上浦村之内落野浦」とあり、当無高。また、「元禄見稲簿」にも上浦村内の高なし村として落野浦・田野浦と見えることから、元禄郷帳作成の段階で上浦村の枝村とされ無高の扱いとなったと思われる。享和三年（一八〇三）の「郷村仮名付帳」（佐伯藩史料）でも同村枝郷とされる。

宝永四年（一七〇七）検地が行われた（文久三年「村明細帳」新納文書）。

享保十一年（一七二六）十二月当村百姓四軒、二十八人が旧杵藩領堅浦の浦代に逃散する事件があったが、翌年一月に帰村している（古史捷＝旧杵藩史料）。宝歴五年（一七五五）の在浦村立位付（佐伯藩史料）は上の村。

文化七年（一八一〇）竈数七十二、人数五百七十八（温故知新録）。二月二十九日忠敬は当浦を測量、また、三月二日にも久保泊浦から始めて当浦摺木まで測量している。

「伊能忠敬測量日記」によれば、人家は摺木五軒、雁ノ子（狩床）三軒、大本（大元）四軒、間脇（間元）三軒、西泊四軒、獅子浦（落ノ浦と田ノ浦の間＝鹿の浦）

五軒、田浦十三軒。文久三年（一八六三）の「村明細帳」によると、竈（かまど）数二百、人数千三百五十八、船大工三人、桶屋二人、酢、醤油、草鞋などを商う小店一軒、酒小売、宿一軒があった。牛十九、廻船五、三枚帆船十二、小舟百三、小引網十一、鰺網三など。

網代は十ヵ所、ほかに鳩浦との持ち合いの網代が十四ヵ所あった。また、鰯干浜が六ヵ所（一町二反余）あり、ほかに鳩浦との持ち合いも六ヵ所（一町一反余）あった。

「旧高旧領取調帳」では四浦の内。浄土宗西山禅林寺派高明山本教寺があり、寛永元年（一六二四）大橋（だいきょう）寺（旧杵市）鏡誉和尚の創建という（豊後国志）。天満神社（五社）がある。

こうして種々の文献を調べてみると、どうも「豊後国志」にいう、鳩浦・落野浦・蒲戸浦・福泊浦を総称して四浦というのは誤りであろう。「豊後国志」以外にこの四つの浦を載せているものが見られない。

やはりこれは、鳩浦・久保泊浦・深良津浦・落野浦が呼び名の基盤となっていると考えられる。もっとも「豊後国志」作成時以前の天正年間（一五七三～一五九三）に、記録が残る大友・島津軍の攻防の時代に、その起源を求めたいと考えている。

久保泊墨山全景（右手前　入江奥が久保泊）